特集：多人数授業を効果的に行うための戦略

趣　　旨

大学では、講義、演習、実験、野外活動等さまざまなタイプの授業が行われている。受講者数という点でも授業の態様はきわめて多様である。10名以下で行われる授業もあれば、100名以上の授業もある。大学によっては、数百名規模になる授業もある。

授業の規模は小さければ小さいほど、教員と学生の物理的・心理的距離は短くなる。両者の相互作用を引き起こしやすくなり、結果として教育効果を高めることができると一般に考えられている。

その効果を期待して、名古屋大学では、初年次学生を対象に一クラス12名という小規模で、基礎セミナーという科目を開講している。この科目は、読み、書き、話す能力のかん養を図るとともに、真理探究の方法とおもしろさを学ぶことを目的に丁寧な指導を行っており、学生の評価も全体的に高い授業である。

名古屋大学の全学教育では、科目ごとに受講者数の上限を設定しており、クラス規模は多様である。基礎セミナーのほかにも、言語文化・英語（コミュニケーション）20名、理系基礎科目（生物学実験）50名というように小規模のクラスがいくつかある一方、文系基礎科目等では110～120名というように規模の大きなクラスもある。これらのクラスの中には、受講者数が多いにもかかわらず、学生の満足度の高いクラスもある。それは、担当教員が教育内容や指導方法等においてしかるべき工夫をしたり、条件整備に努めている結果と考えられる。

今後とも受講希望者の増加等により、多人数授業を設定せざるを得ない事態も予想される。実際に、2006年度から全学教養科目の一部について、これまでの80名という枠をはずして、担当教員の希望

によっては200名規模で授業を行うことが決定された。これは、受講を希望しながらも受講者数制限により受講できないという事態の改善をさしあたり目的としているが、以下のような意見に配慮した措置でもある。限られた教員数の中で少人数クラスを一定数確保するために、可能な授業については多人数で行うべきである、との意見である。また、同じ履修内容でありながら同時に複数開講している授業などについて、教員の指導スタイル等によって結果が大きく異なるという事態を避けるために、それが必要との意見である。つまり、多人数授業は全学教育にとって過去の話とか無縁の問題などではなく、今日不可避の検討課題になっているのである。このような状況の中で、受講者数が多い授業であっても高い教育効果をあげることが必要であり、担当教員にはそのための工夫や配慮事項等を検討することが不可欠になっている。

本特集では、こうした問題意識に基づいて、「多人数授業を効果的に行うための戦略」というテーマを掲げた。なお、本特集でいう「多人数授業」とは、受講者数がおおむね100名以上の授業をさすこととする。全国の各大学、とくに私立大学の実情からすれば、これでも少数に属するかもしれないけれども、名古屋大学では相対的に規模が大きいことを考慮して、このような多人数授業の定義を用いる。

本特集で取り上げる論点の主なものをあげると、以下のとおりである。

・多人数授業は必要悪なのか、大学にとって必然なのか
・多人数授業に固有のメリットはないのか。あるとすれば、それはいかなるものか
・多人数授業のメリットを引き出すための指導上の工夫とはどのようなものか？
・多人数授業のデメリットを克服・緩和するための指導上の工夫とはどのようなものか？

・多人数授業を効果的に行うために、必要な条件整備とはどのようなものか

本特集に関して論考を執筆いただくのは、全学教育の文系と理系科目のうち、比較的受講者の多い授業を担当している4名の教員であり、学生による授業評価アンケートで高い評価を得ている方々である。ご自身の授業の概要を紹介いただくとともに、すぐれた授業を行うための条件、教員に求められる努力・工夫等についての考えを展開していただいた。

ご協力いただいた方々に感謝するとともに、本特集が授業改善のための全学的な議論を行うための一つの契機になることを期待したい。

編集委員長　夏目達也